

出会いは世界を広げていく

交流会を通して

第11回

土肥いつき DOHI ITSUKI

京都の公立高校教員。24時間一人バレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

交流会前史

12月号にも書いたように、交流会はあくまでもその子が通う学校やクラスを補完するものでしかないと、わたしは思っています。しかし一方で、交流会だからこそできることがあるとも思っています。それをひとことで言うならば「ピアな存在が集まる場」であるということです。マイノリティの子どもたちは、常にマジョリティに囲まれながら生活しています。ダイアン・J・グッドマンは『真のダイバーシティをめざして』の中でマジョリティ（特権集団）は「その文化、その社会において支配的な規範は、特権集団の特徴を土台にして成り立っている。特権集団が基準となって他の集団が判断される」としています。言い換えるならば、マイノリティの子どもたちは、常に「基準からはずれた存在」であるということです。だからこそ、マイノリティが集まる場は、マイノリティの子どもたちにとってとても大きな意味があります。ただ、わたしがこのことをわかったのは、はじめてかかわった在日コリアン生徒Nさんへの「失敗」を通してでした。

教員になりたての頃、在日コリアン生徒にかかわらなければならない思いながらも、何もできない日々が続いていました。ところが、教員になって3年目、Nさんがいるクラスの授業を担当することになりました。それをきっかけに、Nさんに「かかわる」ようになりました。ただ、その「かかわり」は、ひとことであらわすと「本名を名のことの押しつけ」、言い換えるならカミングアウトの押しつけでした。

全国在日外国人教育研究協議会（以下、全外教）という外国人教育にとりくむ人々の集まりがあります。全外教が大切にしているスローガンのひとつに「本名（民族名）を呼び名のこと」というものがあります。このスローガンの大切なところは「呼ぶ」ことからはじまることにあります。在日コリアン生徒が本名を名のこととは、日本人教員である「わたし」が在日コリアン生徒に本名で呼びかけることへのレスポンスとして起こることなのです。しかしながら、今の日本社会は「呼びかけること」「名のこと」が困難な状況で

す。「呼び名のこと」ことは、そのような社会を変えていくための相互行為なのです。そして、在日コリアン生徒が「本名を名のこと」ことは、そのようなとりくみのひとつの到達点であり、同時に出発点となります。

しかしながら、当時のわたしはこのスローガンを、単純に「本名を名のこと」と誤解していました。したがって、Nさんへの「かかわり」のゴールは「Nさんが本名を名のこと」と勘違いしていたのです。わたしはNさんの思いを聞くことなく、ひたすら「本名を名のことらないか」と言い続けました。そこには相互行為はありませんでした。最終的に、Nさんはそんなわたしから離れていきました。もっとも、Nさんが卒業して数年経って、そのクラスと同窓会に参加させてもらった時に、当時のことを謝ると「そんなこともあるよ」と笑って許してくれましたが…。

Nさんへのかかわりの失敗にはさまざまな原因がありました。例えば、歴史や文化や言葉など、豊かな朝鮮文化と触れる機会を持たなかったこと。あるいは、1対1の逃げ場のない中でとりくみを進めたこと。そして何より、「本名を名のことらせよう」としたこと。これらの反省が、人権を活動の軸とするクラブである「社会科学部（以下、社研）」の活動へとつながったように思います。

Nさんが高校を卒業した翌年、教員になって5年目のわたしは、はじめて担任をすることになりました。この年、5人の在日コリアン生徒が入学してきました。入学式当日、学年の同和^(注)担当であるわたしと同和部の教員2人で、5人の在日コリアン生徒を同和部室に集めました。表向きの理由は、奨学金の案内や、外国人登録をしに行く時は公欠をとれるということ伝えること、そして社研の活動の案内をすることでした。しかし、本当の理由は「きみ以外にも在日コリアン生徒はいるよ」ということを伝えたかったのです。そして、この時の1人の生徒の言葉が、社研の活動を開始させてくれることになりました。次号にはこの時のこととその後のことを書こうと思います。